

# 聞こえない警報「架け橋」を

## 今村 彩子さん

### 映像作家



「時間がたった今だからこそ、被災地にあらためて関心を持ってもらいたい」と話す今村彩子さん一名古屋市緑区

〈夏日本大震災で被災した、ろう者(盲点)村、ドキュメンタリー映画「架け橋 きこえない心・11」を製作した。自身も生まれつき耳が聞こえない。命に関わる情報が必要な時に、障害者との橋渡りがあったことを実感したという〉

地震が起きた日は愛知県知事府で仕事の打ち合わせをしていました。その直後につけたテレビで、名古屋の海の映像。字幕がなかったのですが、なぜか海を映しているのかわかりませんでした。帰宅してしまえばいい津波の映像を見て、初めて震災と呼び掛けていることを知りました。

震災から時間がたつたけれど、耳の聞こえない人たちのことが報道されてくるといってしまえば、自分だけで済むという何かなとも考えたい。でも、聴覚障害者向けのCS放送から取材の依頼があったんです。震災から日

## 被災したろう者たち

日後に被災地に入り、2年4月10日に10回は訪れました。

取材をしようと、地震直後の津波警報が聞こえず、どうすればいいかわからずいたと話を、通じがなかったおまわりさんに助けってもらったところもありました。障害者の死体遺体が住民全体の3倍だったという被害もありました。おまわりさんが巧くしていれば助かった命もあったはずなんです。

避難所でも食料配布を要するオウンスが聞こえず、周の機嫌に神経をとがらせていないといけない。年間費は努力がなくなり、困難に状況を経られない。生活は大変なものでした。

〈映画では、緊急の場合に構え、希望する住人の部屋の合鍵を自治会が預かる名古屋の団地を失って、自治会長と住人のろう者男性が交流する姿を取り上げた。聞こえない人、接関係なさそうだが、聞こえない人と聞こえる人をつなぐヒントがある

という〉

2人のやりとりがとても良かったんです。初めて男性宅を訪れた時、会長は同様に手話通訳者を介さず、小梨のホワイトボードを通じて、筆談で身の上話を切り出しました。目の形が相手の手話「ロシニエ」シヨンを取り、心を通わせようと一生懸命だった。誰の顔か知りませんが、聞いていません。そうやって高き合い、階段からつながりをつなぐことが大事なんです。



聞こえない人も夢み寄っていかないといいけない。異な目で差別はないのだから、「あなたは何もしてない」と知っているにしろ必要がある。ピースで小物をつくめるのが得意な被災者の女性は、折に訪れて近所の人にあてていました。『あなたこそ何かをしてくれていい気いさという時に助けを求めた顔が

いまむら、あやこ、1999年名古屋生まれ。小学生の時、字種を『手話』(11)、『手』(12)『手』(13)を見て、映画監督を目指す。愛知教育大学、在学中に年間、米カリフォルニア州立大学、リンドン校に留学して映画製作を学んだ。スウェーデンをテーマにしたドキュメンタリー映画を撮り続けている。

一昨年夏に映画始めた制作陣は職員が足りないものでした。製作陣は職員が映画を見たとききつかけ、全日本より応援と協力してくれる面々の防犯警察をやって来ています。取材した被災者にはまだまだ仮設住宅で暮らす人もいますから、今後も被災地を訪れていくつもりです。

以前の私の原動力は怒りでした。「耳の聞こえない人の現状を知っていられた」との思いが先に立っていた。でも、それは興味のない人に「聞きなさい」。求めるだけでは満足は得られない。何かをおもてんぱし、一緒に考えをきくかけとなる映画をつくりたいです。

今後は日々障害者との交流の中で、これらも経験を作りたいですね。これからも映画を撮りながらみんなのことを表現していきたいと思っています。

聞き手、写真・鈴木沙田真

